

草庵仏教

第144号
(発行日)
2002年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

お念仏の解決

F 「東京に住んでいる二十七歳の息子のことで悩んでいます」

D 「どういう悩みですか」

F 「息子からときどき電話があるんですが、何かにつけて親が悪い、親が憎いというんです。どうしてそんなに憎まれねばならないか。いろいろと反省してはいますが」

D 「どんなことが反省点ですか」

F 「上に兄がいて、兄はもっと勉強ができるものですから、兄とつい比較してしまうことがあったのだと思います」

D 「そういうことはよくあることですから、憎まれねばならないほどのこととも思われませんか」

F 「(親が憎い)と私たちを電話で責めてきます。私も反省するところがありますから、初めのうちはじつと聴いています。が、あんまり言われると、(そういうけど、あんたも悪い点を改めたら)とさとしたり、時には逆ギレしてしまいます。そうするともっと激しく怒ってきます」

D 「二十七歳でしたら、もう親から精神的に自立していてもいい年令ですね」

F 「精神的に自立するというのは？」

D 「たとえ子供の頃、親の育て方が少々まづかったとしても、

それをいつまでも親のせいにするのではなく、自分の中にある不満な思いはまず自分自身に問題があるのではないかと主体的に受けとめてみることで。自分の苦しみや憤まんをいつも他の責任にしているかぎり、人間として成熟していきません」

F 「人間として成熟していくというのには」

D 「自分に起こってくる悩みとか不満を、他者や世の中のせいにする前にまず自分自身に問題がなかったかを反省してみることで。自分の問題として受けて、そこから対処していくことが人間の成長のプロセスだと思えます。お聴きしていますとあなたの育て方が特に悪いとは思えません。ですから息子さんの場合、息子さんの怒りは自分自身の中に自分でとても処理できないほどのやりきれないものがあるって、それを軽減するためあなた方にぶつけているのではないのでしょうか」

F 「そうかもしれませぬ。それで、いろいろ息子にアドバイスしたりするのですが、それが返って反発されてしまいうらいになりませぬ。どうしたらいいのでしょうか。お念仏ではこうした問題にどう解決を与えてくれる

のでしょうか」

D 「お念仏は、総じてこの世のさまざまな問題、自分なりに解決するための教えではないと思えます」

F 「真宗は人生上の諸問題を解決する教えではないのですか？」

D 「ええそう思います。ただし一般に考えられているような意味での解決ということでは」

F 「普通は病気になると病気を治すことが解決であり、お金に困るとお金に困らなくなることで解決であり、子供が勉強しないとか勉強するようになることが解決といえますね」

D 「ええ、世間一般にそういうことが解決といわれますし、またそういう解決を求めることも大事なこと。そういう解決を求めることはいわれなくても自然にやっていることです。政治的解決、経済的解決、医療的解決、教育問題の解決などはすべてこういった解決です。」

しかしながら、たとえ病気が治ってやれやれと思っても次に子供の事で問題が起きて悩み始める、やっとな子供の問題がうまくいくようになると次に金銭面の困りごとが起こるといいうように、一難去ってまた一難というのが人生の実際です。もしこれらの問題がすべて解決した後に幸せがあるとなら、いつまでもたっても幸せは来ないですね。

幸せは遠い未来に夢として思い描くだけです」

F 「世の中のほとんどの新興宗教なり新宗教などは、題目を唱えたり、先祖供養をしたり、ご祈禱をしたりして、それによって商売がうまくいくようになり、病気が治ったり、人間関係が急によくなったりすることを表看板にしていますね」

D 「ストリートに問題を解決しようというのですから、わかりやすいですし、多くの効験話がたえず強調され、宣伝されていますから、多くの人がワラをもすがる思いでそうした現世利益を強調する宗教に入るので。苦しくてたまらないときにはちよつとでも御利益があればという切迫した気持ちで入るのだと思います。効果がなくて元々ということでしょうか」

F 「末期ガンにかかった人が、このキノコを食べれば治るとか、この薬草を飲めばいいとか、このワクチンは効果があるとかいうのを聞いて、半信半疑でもやってみて、もし当たればもうけものという気持ちと似てますね」

D 「そう思います。そういう解決から言うと、真宗では、お念仏したら病気が治るとも、お念仏したら家庭の争いはなくなるとか、お念仏したらお金に困らなくなるのか言いませんから、なかなか人は寄って来ないのかもしれないですね」

【住職つれづれ日誌】

五月四日。甲子園の都ホテルで法事。ロウソクも線香も焼香もしてはいけな
いとのホテル側の要請があり、焼香の
代わりに献花となった。以前、芦屋の
竹園ホテルで法事をしたときはこうい
う制約はなかったが、都ホテルでは厳
しい制限があり法事をしている雰囲気
にはなりにくかった。先日、宝塚観光
ホテルに行ったが、このホテルでは法
事用の部屋を用意しているとのこと
見せてもらった。ホテルでの法事は便
利で、施主も楽であり、食事も美味な
ものが用意される反面、宗教的・仏教
的な精神性が乏しい。どちらかといえ
ば法要そのものより、後のお斎がメイ
ンになっている。

五月二十八日。幸田昌山師が逝去され
たとの報を聞く。幸田師はもと東大
阪市で会社を経営されていた方で、後
年発心して禅修行をされ、鳴尾の自宅
を金光明庵と名づけて解放し、坐禅
の指導に当たられた。毎朝誰でも参禅
ができ、私も三度ほど寄せていただい
た。私が「草庵仏教」に現代の仏教復
興の可能性を期待するようになった一
因は、師のお姿からである。真に仏教
に心を寄せる人があれば、僧俗を問わ
ず、規模の大小を問わず、自宅を仏教
の道場として解放して、そこに縁ある
人が自由に集い、仏教にふれていた
く。その中からまた自宅を仏教の教え
を伝える道場として解放する、そのよ
うな人が誕生していくという、その連
続と拡散の中から日本仏教が再生され
ていけばというドリームを私はもって
いる。

息子さんをご両親を憎まなくな

り、また自分の人生にすぐに満
足を見つけ出すことができるよ
うになるというわけではありま
せんね」

F 「では、具体的にお念仏はど
ういう意味なのですか」

D 「お念仏を聞くというのは、
阿弥陀仏が私たちとともにまし
まして、阿弥陀仏が私の救いの
主であること。ということには息
子さんの場合もあなた自身の場
合も、人間を真実に導き、まこ
との幸せを恵みたまうお方は阿
弥陀仏であることを聞くのです」

F 「ということは」

D 「阿弥陀仏が（汝の力では今
はどうすることもできない、汝
の息子を本当に幸せにする責任
は弥陀が受け持つて導く。汝は
汝のできることを息子のために
していけばいい。汝の重い荷物
を私にゆだねてよい」との仰せ
であります。南無阿弥陀仏は（私
が引き受けるから我をたのめ）
との大悲です」

F 「じゃあ私は何もせんでもい
いんですか」

D 「どうしてもしなければなら
ぬことは一つもありません。阿
弥陀仏が苦悩しているあなたの
重い荷物を担ってくださるので
す。しかし、その阿弥陀仏の大
悲のご恩が知られてくると不思
議にもご恩に応えてご用を勤め
たいという喜ばしい思いが沸い
てきます。如來の大悲から、何
かせいたただこうという願いが

とえですか」

D 「いわゆる私どもの人生の荒
波のことで、大難小難を大波小
波の波に譬えたのです」

F 「経済状態が悪化するとか病
気になるとか子供がひどく反発
するとか親戚同士の仲が悪くな
るとかという、大小様々なさわり
のことですね」

D 「さまざまな難儀なことを解
消しようというのは、個人的な
問題だけではなく、政治経済や
科学技術や医療などの領域でも
同じです。食料の確保や治安の
維持や経済的困窮者への福祉や
鉄道や道路を造るなどの対策と
実施なども同じです。

ところがお念仏は難儀な問題
を解消していく方法ではなく、
さまざまな問題をなんとか解決
しようと善処しながらも、問題
だらけの中で安定し充実し、そ
れらの問題があるままに幸せを
感じつつ生きる智慧となってく
ださるのがお念仏です。金子大
栄先生は（お念仏はこの世を救
う教ではない。この世から救わ
れて、この世を救うことに善処
していく教である）との趣旨を
申されています」

F 「この世から救われるのがお
念仏だといわれるのですね」

D 「ええそうです。この言葉は
非常に深い意味がありますね」

F 「では息子の問題などはどう
なんですか」

D 「お念仏を申したら、すぐに

F 「お念仏を申しても効験はな
いし、また効験を期待してお念
仏申すわけではないとしたら、
お念仏の救いというのはどんな
ものなのでしょう」

D 「お念仏をいただくことによ
って、さまざまなこの世の問題
に耐えていき、ひがまず、いた
ずらに落ち込まず、いろんな難儀
なことに善処しつつ、問題があ
るままで充実して生きていける、
そのような智慧であり力となっ
てくださる。しかも、さまざま
な困った問題を縁として、お念
仏が人生のまことをいっそう深
く教えてくださる」

F 「諸問題が解決するというよ
りは問題があってもその中で真
に生きる支えとなり、またそれ
によってなお深く生きるように
なる智慧、それがお念仏だとい
われるのですね」

D 「ええ、人生には問題がいろ
いろあってもかまわないし、問
題だらけの人生を精神的に安定
して生きる支えとなるのがお念
仏ではないでしょうか。親鸞聖
人のお言葉では、
（難思の弘誓は難度海を度する
大船）

とお示しになっていきます。お念
仏は、荒海を渡す大きな船のよ
うなもので、海が大波小波で荒
れていても、その荒れる波を受
けつつ乗りこえしめるようなも
のです」

F 「大波小波というのは何のた

歎異鈔 第十二章 第三講

「あやまつて、学問して、名聞利養のおもいに住するひと、順次の往生、いかがあらんずらんという証文もそろそろぞかし。」
(歎異鈔第十二章より)

(現代語訳——学問をしても、それによつて名誉や利益を得ようという誤った思いをいだく人は、この世の命を終えて浄土に往生することができるとかどうかわしいということの証拠となる文もあるはずです)

この一節について、今回は聞思したいと思ひます。

〈学問して名聞利養のおもいに住する〉とはどういうことでしょうか。

仏教の学問をすることは、仏法の道理を深く理解し、仏法に惑うている人に仏法の真実性を明確にすることによつて、仏法に帰入していただく、そのための仏教の学問であります。ところが学問をすることによつて名聞利養を求める、あるいはそういう方向へ流されていく、こういう人たちがここで〈学問して名聞利養のおもいに住する〉人と仰せられているのでしよう。

このことは仏教に限らず、学問研究者が学問をしていく中で、ただ純粹に真理を求めたり技術の革新のために研鑽して

いるかというところ、研究を行うその人は煩悩具足の凡夫ですから、自分の学問が多くなると認められて自分の名を高めたいと願うことはよくあることで、こういう欲望を名聞の欲いわゆる名譽欲といつて、仏教でいう五欲の一つです。

五欲は財欲、色欲、食欲、名譽欲、睡眠欲です。色欲は性愛の欲望のことです。欲望の代表的な五欲の中に名譽欲が入っていることは、名譽欲が外の四つの欲望に負けず劣らず強い欲求であることを表しています。

名譽欲というのは、日常生活のレベルでも「人に良く言われたい、良く思われたい、悪く言われたくない、悪く思われたくない」という意識として始終起こってきます。我執我愛の自我意識が名声を求める心となつているのでしよう。

しかも名聞(名声)を求める心の底に巣くつているのが利養を求める心です。利養というのは「利欲をむさぼつて自分の身をこやすこと」です。

名声が高まると、高収入につながりやすいものです。たとえば、有名になると、あちこちから招かれて高額の報酬を受け取ることも可能となります。芸術・学術・芸能・スポーツ関係などでは特に顕著です。

すなわち名声には利得がともないから、名譽を求める心には利養を求める心がつきものです。その姿を「名聞利養のおもいに住する」といふのであります。

仏法以外の世間の学問を修める者が名声を望み利益を求めることは、それも煩惱ですからできるだけ避けねばなりません。名聞利養を求めることを厳しく戒

めているのが仏法。その仏法を学ぶ者が名聞利養を求めるのは大変浅ましいことです。

仏法は自我への愛執を離れ、我欲を淨化して、清淨眞実の仏陀になることを理想としているのであつて、仏道を歩む者は自分と他者がともに煩惱を悲しみ、煩惱を超えた清淨なさとり領域へいたることを願つて生きる者であるはずでしよう。しかるに煩惱を超えていく仏教の教えを学ぶ者が、名譽や利得のために仏教の学問をするのは道はずれたよこしまなあり方といわねばなりません。

これは親鸞聖人の時代だけのことではありません。昔も今も仏教を修める者が一番陥りやすい誘惑は、仏教を学んで名聞利養を得ようとすることです。

聖人が比叡山で天台宗の修行僧として修行に励んでいた頃、多くの僧侶が仏教を学んでいましたが、自分が眞実にあつて救われたいという純粹な心で学んでいる人はむしろ少数者だったように思ひます。学問を研鑽にして多くの人の前で講釈し、講師や人師となつて名声を得、それによつて経済的な豊かさや権力をも得ようという野心で学問していた人が少なからずいたようです。これは現代においても十分あり得ることです。だから今日、仏教学は非常に盛んですが、仏法そのものは盛んにならないといわれます。

また、ひとたび眞実にであつて救われた身になつても、名聞利養を求める煩惱はひつこくついて回ります。親鸞聖人はこの心をじつと凝視しておられ、この煩惱を慚愧されていきました。お言葉に「是非しらず邪正もわかぬこのみなり

小慈小悲もなければ名利に人師をこのむなり」とあり、小さな愛情すら無いのに、人の師となつて名利を求める私であるという実に厳しい自己批判をしておられます。

さてここでは、せっかく浄土の教えに遇いながら、我が身の助かる道を眞剣に聞こうとせず、浄土の学問を修めることによつて名声や利養を得ることに心のポイントが置かれていると「順次の往生はいかがであらうか」、すなわち来世に浄土に生まれることはおぼつかないといわれるのです。

この「順次の往生、いかがあらんずらん」という証文は、これは聖人八十八歳の時のお手紙をさしているといわれています。その中で、法然聖人のお膝元におられたある日、法然聖人が

「ものもおぼえぬあさましき人々のまいるたるを御覧じては、往生必定すべしとてえませたまひしをみまいらせ候いき。ふみぎたして、さかさかしきひとのまいるたるをば、往生はいかがあらんずらん」と仰せられたことを記しておられるのです。我が身の往生を定めることをなおざりにして、浄土の法文の学問沙汰をして賢こぶる人たちをご覧になつて「あの私たちの往生はいかがなものであらうか」と仰せられたことを書いておられます。この聖人のお言葉を、学問は無いけれども素直に本願を信じて念仏を喜んでいる人たちに対して「浄土の經典やその解釈を学ばない者は往生は定まらない」といのおどろかす学問沙汰の人たちを批判される、その証拠の文とされたのだといえましよう。

三河の七三郎

江戸時代後期に、三河（名古屋地方）に七三郎という厚信こうしんのお同行さんがいました。妙好人として多くの聞法者から敬われていた方です。日頃、香樹院徳龍師に親しくご教示を受けていました。その七三郎に次のような逸話いっわが残っています。

七三郎がいた当時のことです。後生ごしやうが苦になって熱心に真宗の教を聞くようになった一人のお同行さんがいました。死んだから先自分はどこへ行くのか、死んだら地獄おに墮おちるのではなからうかという心配から、聞法を始めたようです。

〈後生ごしやうの一大事〉という言葉ですが、これは死後の自分の生まれ先の問題ということが直接的な意味でしょうが、要するに「大切な自分自身はいついついにはどうなるのか」「自分自身はいついついどこへゆくのか」「自分の永遠のゆくすえはどうなるのか」という、我が身の未来永遠を問題する大事のことです。

このお同行は後生が苦になって真剣に聞法にこころざし、遠近各地の名師や妙好人を訪ねて聞法していたようです。ある時、七三郎に教えを請うため訪ねていったところ、七三郎はただナムアマミダブツ、ナムアマミダブツとお念仏ばかりを称えていました。そこでこのお同行も一緒

にお念仏を称え続けていました。そうするとそのお同行、こくりこくりと居眠りいねむりをはじめました。そばにいた人がこのお同行の居眠りをしてる姿を見て「後生が苦になり一大事のおもいで遠方からここまで訪ねてきておりながら、居眠りいねむりをするとは」と、その聞法姿勢にたいして批判めいたことを七三郎に語りました。すると七三郎、居眠りをしてるお同行を批判するようなことは少しも申されませんでした。ただ「私も昔はそうであった」と話されたのでした。

さあ七三郎のこの一言が何かの縁で師の香樹院師の耳に入りました。この七三郎さんの「私も昔はそうであった」という言葉を聞かれた香樹院師が、かたわらの人に「七三郎はまだそんなところにいるのか」と仰せられました。

この香樹院師の言葉がまた伝えられて七三郎の耳に入りました。七三郎は非常に驚き、「七三郎はまだそんなところにいるのか」と師が言われたのはよほど深いわけがあると思い、早速三河から京都におられた師を訪ねました。ところがあいにく師は加賀の国へ出張しておられました。それを聞くと七三郎、すぐその足で加賀まで香樹院師を訪ねて行きました。

不審ふしんが起これば、苦勞をいとわずどこまでもお聞かせていたのだきたいという七三郎の燃えるような聞法の志に心を打たれます。まことに純粋な宗教心は人間の内奥からわき起こるもっとも深くて強い欲求です。財産をつぶしてもこのこと一つを聞き開かずにはおかないという心であり、腕を失い目を失ってもこのことを聞き開かずにはおかない心であり、野宿

しても、世界の果てまでも真実を求めて行こうという心であります。釈尊が王子の身分でありながら城を離れ、財産や権力を捨て、家族からも離れて真実を求めた宗教心は、釈尊だけにある心ではなくて、どんな人の心の中にもその一番深いところにあるのです。七三郎さんの聞法の姿勢にこの宗教心の発動を感じます。

さて、加賀についた七三郎、さっそく香樹院師を宿に訪ねて「七三郎はまだそんなところにいるか、との仰せはどのような思召おぼし召めしでございましょうか」と申し上げたところ、師は姿勢を正し厳かな声で「七三郎、今はどうじゃ、今はどうじゃ」と仰せられました。これを聞いた七三郎、初めてその思召おぼし召めしに気がつき、冷や汗を流しておそれ入るばかりでした。そして「後生の大事の気持ちのわからないのは昔のことと思いましたが、今もやはり後生知らずの邪見な者はこの七三郎でございませぬ」と心の底からあやまりはてました。そして「香樹院様なればこそ、ようこそ私の誤りをお知らせくださりました」と感謝して三河に帰られたとのことです。

この香樹院師の「今はどうじゃ」の一言は実に厳しい言葉ですが、この言葉によつて七三郎は自分が知らず知らず高上こうじやうがりをしていて我慢・橋慢きょうまんの自分を知らされたのです。貪欲こんよくや瞋恚しんに比べ、橋慢きょうまんや高上こうじやうがりの煩惱は自覚されにくいものです。

聞法をしていくと、いつの間にか自分
は人の知らぬことを知っており、人のせぬ殊勝しゆじやうなことを知っており、人よりも何か値打ちがついたように知らず知らず思っ

てしまします。また、長年聞法すると、以前の自分より「仏法者になった」「信心深くなった」「心が純粹になった」「道理が分かるようになった」というおごりたかぶりが生まれます。これが聞法者が一生心しておかねばならない、またいくたびも省みていかねばならぬものであります。

先人が、「仏法を聞いているといつの間にか仏法が鉄砲てつぽうになってしまふ」と自己批判されました。仏法はどこまでも自己否定の道です。ところが聞法に励んでいくと、いつの間にか学んだ仏法でもって他者の批判をする道具にしてしまふのです。自分を打つ仏法が逆に人を打つ鉄砲てつぽうになってしまふのです。よくよく気をつけたいことです。

これについてですが、とかく「自覚が大事である、自覚せよ」と迫る思召おぼし召めしは、「自分は自覚できた」という信心になりやすく、そうなる他者に対して「汝はまだ自覚が足りぬ。自覚ができていない」と批判することになりかねません。大谷派の同朋会運動の中でこういう傾向が現れたことも事実です。「私は自覚ができました」という信心は、「昔の私はまだ自覚ができていなかったが今は自覚者になった」とあり、「あなたはまだ自覚が足りぬ、自覚ができておらぬ」と高みより人を批判しかねません。

どこまでいっても「私は自覚ができてきた」とはいえない。「どこまでも自覚もできない、あいもかわらぬ無自覚な私です」という、徹頭徹尾てつとうてつび、弥陀に助けられるほかなき身であります。私の方はゼロ、南無阿弥陀仏が全てであります。